

★龍口の歴史

県境をまたぎ伊賀竜口、大和龍口に分かれているが、元々は一つの地域であり、地名の由来としては諸説あるが、まず室生龍穴神社へ名張方面からの参拝道の入口にあたるところからこの地名が付いたと考えられている。龍穴神社は、室生より古い歴史を持つ古社で、平安時代には朝廷から雨乞いの使者が使われるほど有名であった。

その他にも古くから赤目四十八滝の竜ヶ壺伝承や県境の長坂山を少し西へ下った尾根に竜王宮を祀っていることから竜神信仰に由来するものとも考えられる。

竜口の初見は平安中期の寛治2年（1088）の「伊賀国庁宣案」に「国見杣麓字竜口」と書かれており、当時は大和龍口も含めて伊賀国名張郡に属していた。また、同時期に竜口の開発は、名張郡司の丈部氏（はせつかべし）により進められるが、やがて大和側三本松方面から興福寺が進出、伊賀側矢川方面からは東大寺が進出し、両寺院の勢力争いの最前線となり北を伊賀竜口、南を大和龍口として二分されていた。

★百地氏

伊賀流忍術の開祖と呼ばれる百地三太夫、戦国期の百地丹波守等が百地家の棟梁と考えられる。三太夫と丹波がしばしば同一視されるが、その根拠はないとされている。但し、百地家の棟梁は、代々三太夫を名乗っているといわれている。

近世初期と考えられる「国民郷土記」には、黒田の悪党の大江氏の出自と記載されており、室町期には有力寺院の勢力争いの狭間で地頭として百地氏の支配が両龍口一帯に進んでいたものと思われる。また、「大和志料」に「龍口城址、三本松村龍口にあり」とし「北畠氏聞書覚書」を引用して「百地氏、龍口四村という。内、西谷、滝谷、戸取（砥取）という。百地なる地侍あり。昔より伊賀大和境に山城、両国の中を鎮めて百地は丹波という。多気御所末縁の由、云々」と記しており、伊勢北畠氏に被官していたことがうかがえる。また、「大和国郷土記」に「百地丹波守正西」の記載が見られ、百地屋敷の墓地にある墓碑銘にも「正西」が刻まれている。

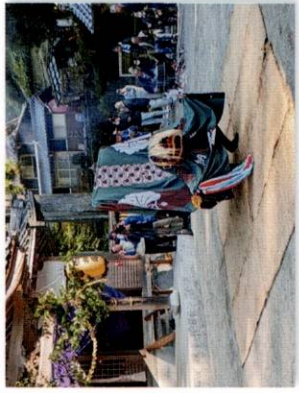
江戸時代、伊賀は藤堂藩の領地となり、藩は信長に敗れたかつての国人衆を懐柔政策として、無足人（下級武士）身分に取り立て名字帯刀を許した。百地氏も弘化2年（1845）の「伊賀国無足人帳」には、御目見無足人として竜口村百地俊次、子万蔵の名が記されている。

なお、戦国期には、伊賀市喰代（ほうじろ）にも百地一族が城を築いており、百地一党と考えられるが、南北龍口を含めそれぞれの百地氏の関係性を知る史料は残されていない。

★白山神社

伊賀・大和両龍口に鎮座し、祭神は菊理媛命（くくりひめのみこと）。伊賀竜口の社には、第2次天正伊賀の乱直前の天正9年（1581）9月の棟札が残されており、竜口が戦災に遭わなかったことがわかる。

大和龍口の社には、天文7年（1538）と永禄7年（1564）の棟札に「地頭百地殿」の銘が残されている。白山神社は、両村の他、隣接の上三谷（三重県）、西谷（奈良県）にも鎮座しており、4ヶ村にまたがる白山信仰文化圏ができていたことがうかがえる。

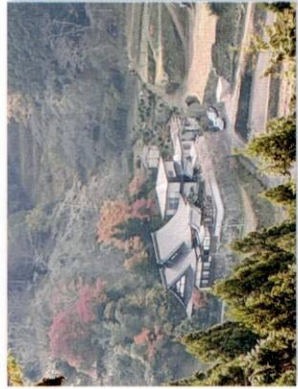


写真の獅子舞は奈良県教育委員会指定無形民俗文化財

龍水山

★法光寺(大和龍口)

浄土真宗本願寺派、本尊阿彌陀如来立像。寺伝によると元々は眞言宗に属して地蔵菩薩を本尊としていたが、文明年間（1469～1487）に本願寺第8代蓮如上人が来化（らいけ：来訪して教えを説く）、里人が帰依、改宗し本願寺派に属した。



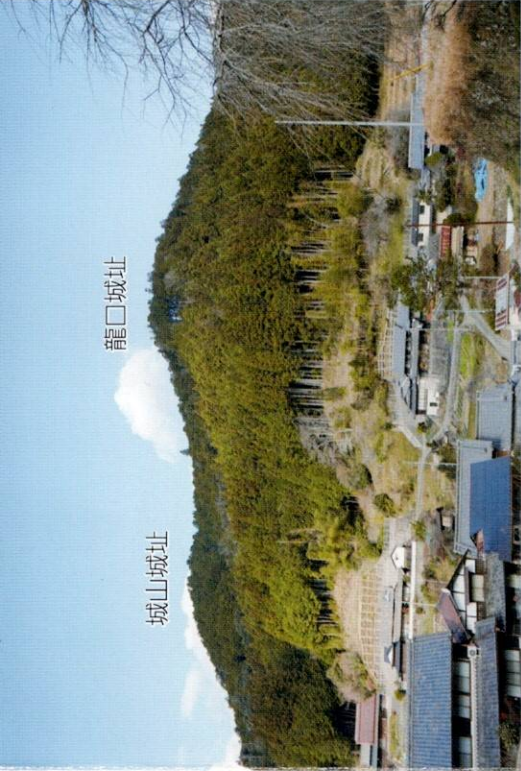
龍口城址から法光寺を望む

★一夢法師

本名安田実誉（1698～1749）鈴鹿郡川崎村に生まれる。諸国を巡錫中にたまたま大和龍口の百地家に留錫。同家の厚意によりこの地に晩松庵を建て、ここで享保15年（1730）8月から延享4年（1747）10月まで、18年の歳月を費やし写経をし、没後の宝暦2年（1752）正月に赤目町丈六の丈六寺に「大般若経六百巻（4,820,693文字）」「法華経八巻（69,384文字）」を奉納。いずれも名張市指定文化財。寺には、經典と共に「大般若経奉納記念板」及び「大乗経八巻奉納碑」が残されている。



参考文献：「名張市史」「室生村史」「角川地名大辞典奈良県」

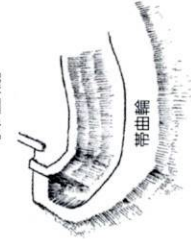


全 貌

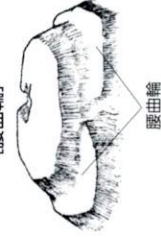
★城山城址 宇陀市室生龍口字城山

大和龍口百地氏宅の背後にある城山の西側頂上にある城址（じょうし：城跡）。土壘が主郭部分を取り囲んでおり、南側の中央部が低く、虎口（こぐち：入口）と考えられる。西側横堀は、北・南面の中程まで巡り、西側からの侵入に警戒した構造になっている。逆に東側の切岸や堀切は甘く、東の龍口城址とは、相互に連動し機能していたと考えられる。また、大和龍口へ下る斜面の途中には、いくつかの削平地がみられ、登城路を警戒する防御施設であった可能性がある。なお、斜面を降りた龍口集落背後の西側尾根上には、東西北の三方を土壘で囲んだ西峰城跡も確認されている。さらに、尾根伝いに250m程下る北側に張り出した部分に、削平された場所がある。ここは、山が両側から谷にせり出しており村への侵入者を見張る絶好のポイントとなっている。

〔帯曲輪〕



〔腰曲輪〕



縄張り図：伊賀中世城館調査会作成

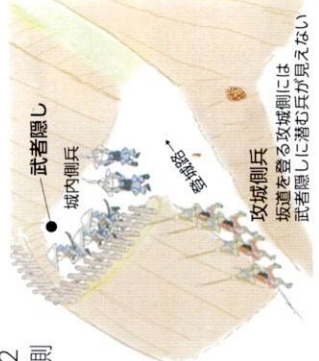
大きな曲輪に付随する腰曲輪と帯曲輪は、似たような存在であり、一見すると腰曲輪のほうが簡単な構築物だが、本文中にあるように使用目的が違ふ。どちらも防禦構築物として、とくに土の城になくはない存在である。

★龍口城址（百地丹波城址）名張市竜口字田原本

龍口百地屋敷の背後にある城山の東側頂上にある城址（じょうし：城跡）。伊賀竜口と大和龍口を結ぶ峠から伊賀竜口の墓地の横を抜け、急斜面の尾根伝いに登城道（参道）が設けられている。中間の特に勾配が急な部分を登りきったところに小さな削平部分があり、さらに上とわずかではあるが堀切跡も見られる。登りきったところには、帯曲輪に土壘を設け、武者隠し的な遺構も見られる。白菊稲荷大明神を祀っている部分を主郭とし、2段の曲輪と土壘が連り、北東隅には土橋とみられる遺構があり、ここが虎口（入口）と考えられる。特に東側の遮断性が大きく、逆に西側の切岸や堀切は甘く、西側頂上部にある城山城址とを結び200m程の尾根伝いには、防御的遺構は見られないことから2つの城は、相互に連動し機能していたと考えられる。また、外側の帯曲輪は、南北で切れており袋小路となっている。



縄張り図：伊賀中世城館調査会作成

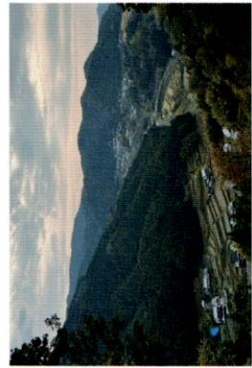


攻城側兵
坂道を登る攻城側には武者隠しに潜む兵が見えない

龍口城



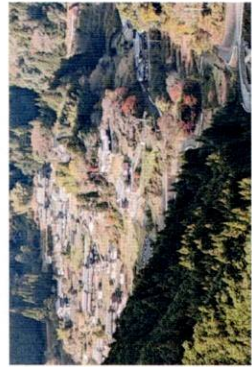
黒田・結馬・井手



大和龍口



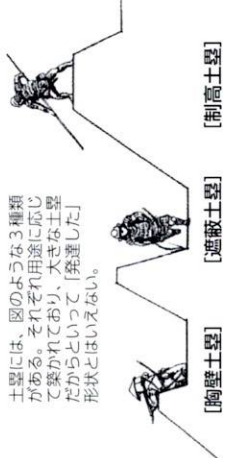
御在所岳



西 谷



城 山 城



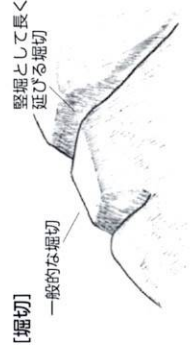
土壘には、図のような各種類がある。それぞれ用途に応じて築かれており、大きな土壘だからといって「築造した」形状とはいえない。

〔陶壁土壘〕

〔遮蔽土壘〕

〔制高土壘〕

「土の城指南 電子版」2015より



〔堀切〕

一般的な堀切
堅堀として長く延びる堀切



排土による土壘状の高まり

鹿沼市HP加圖城より